

経験者採用試験の受験を考えている方へのメッセージ
～採用者の座談会（令和元年5月開催）～

経験者採用試験に合格して各府省に採用された方々に、公務員へ転職しようと思ったきっかけなどについて語っていただきました。

ご協力いただきました皆様

- 太田千裕氏 内閣府政策統括官（経済社会システム担当）付・
参事官（総括担当）付・政策企画専門職
（平成30年度経験者採用試験（係長級（事務）））
- 中原一弥氏 財務省大臣官房総合政策課・調査主任
（平成30年度経験者採用試験（係長級（事務）））
- 川上裕央氏 外務省総合外交政策局国連企画調整課・主査
（平成29年度外務省経験者採用試験（書記官級））
- 上 佳孝氏 農林水産省政策統括官付・地域作物課・企画班法令係長
（平成30年度経験者採用試験（係長級（事務）））
- 中村陽介氏 観光庁参事官（外客受入担当）付・主査
（平成30年度観光庁経験者採用試験（係長級（事務）））

質問1：今までの仕事と現在の仕事の内容、それらの関係性などについて、教えてください。

（内閣府）

太田 氏：前職は銀行で、新卒で採用されて5年ほど在職していました。最初の2年間は岡山県で勤務しており、リテール営業を行っていました。その後の3年間は、市場管理業務といって、金融市場の運用以外の部分（法務、財務、総務など）を請け負っていました。専門性の高い部署で、同じ金融業界内で転職する方でも、その部門の中で転職される方が多い分野でした。



現在行っている業務は、大きく分けて4つあります。1つ目が「骨太の方針」のとりまとめに向けた調整業務、2つ目が経済財政諮問会議に係る資料作成等、3つ目が国会対応業務、4つ目がPFSと言われる成果連動型の民間委託契約手法に関する取組になります。

分野としては今までの仕事との連続性はないのですが、前職で調整やどこにも所属しないものを振り分けして対応するというような業務も担当しておりましたので、そういう意味では共通している部分があります。

司 会：内閣府は第一志望だったのですか。

（内閣府）

太田 氏：受験の際には明確に決めていませんでしたので、業務経験と関係するところや調整関係業務があるところを官庁訪問させていただきました。官庁訪問をしていく中で、幅広い業務に携われるとお聞きしたことや、面接で接した方々のお人柄から、内閣府が一番合っていると思いました。私は特に外国人政策や子どもの貧困対策といった分野に興味がありました。現在は直接そこに関するような業務をしているわけではありませんが、幅広い分野を扱いますので、新しい興味を見つけていけるのではと思っています。

(財務省)

中原 氏：私も銀行で新卒から6年間働いておりました。最初の3年間は営業店で民間の法人への融資や、赤字で経営難の企業の立て直しといった再生支援業務をしていました。残りの3年間は本部の企画部門で業務簡素化・効率化といった業務改革に従事していました。

現在は、日々変動する経済情勢の分析であったり、所管する「経済財政諮問会議」の発言要領、資料の作成などを行っています。また、日本の麻生財務大臣が他国の財務大臣や関係者と会うときに日本経済はどういう状況にあるという話をするための説明資料のとりまとめを行っています。



司 会：現在の仕事と今までの仕事でどのような違いを感じますか。

(財務省)

中原 氏：銀行に勤めていた際には、民間法人に融資をするなどミクロの話での民間経済には関わっておりましたが、それは必ずしも現在のマクロな国内経済に関する業務と連続性があるものではありません。

ただ今の部署は経済の知識を生かしつつ財務省の色々な部署と広く関わるところであり、経験者採用の自分にとって学びの多い、刺激的な部署に配属していただいたのかなと思っています。

(外務省)

川上 氏：私は大学を卒業後、新聞社で7年半、記者として地方の政治・行政や司法・警察、スポーツといった幅広い分野の取材、記事の執筆等を行っていました。退職後にイギリスの大学院で国際関係学、特に平和構築について学びました。修了後、国連機関でインターンの期間も含めて4年半勤務し、途上国の開発支援に携わりました。

現在は、国連企画調整課という部署で働いています。外務省内では国連関係を扱う部署はたくさんあるのですが、国連企画調整課は、それら全体をとりまとめる課室となっています。例えば、内閣総理大臣が毎年一回国連総会に出席されるのですが、その際の準備を取り仕切る部署となっています。私自身も、要人往来に関する種々の調整業務のほか、日本が立候補している国際機関選挙の事務局や国際機関における調達への日本企業の参入支援等、様々な業務に関わっています。



司 会：前職の経験は、今後の仕事にどのように活かせると感じますか。

（外務省）

川上 氏：前職では、東ティモール、フィリピン、タイの3カ国の国連機関で勤務していました。それぞれの国で、相手国の外務省を含めた政府機関と一緒に仕事をすることが多く、国レベルの国連諸機関全体としての開発支援計画を策定するといった仕事をしていました。

また、現地政府と一緒にセミナー等のイベントを企画したり、外交団と開発課題について意見交換する機会を設けたりと、国連機関の職種の中では、比較的外交に近い仕事をしていたと認識しています。

新聞記者としての経験も、情報を取ってきて、わかりやすく伝えるという仕事ですので、今後の在外公館勤務においては、外交政策の意思決定に資するような情報収集がメインとなった際、スキルを活かせるのではないかと考えています。

（農林水産省）

上 氏：私は6年間、自動車部品のエンジニアをしていました。主な内容としては生産技術として、人手でしか行えない製造作業の自動化を研究開発する業務を行っておりました。その中で、産業用ロボットやディープラーニングを活用しつつ、コストや製造スピードに優れた自動化を検討しておりました。

現在所属している課では、砂糖、でん粉、そば、なたねを所掌しており、その中で私は、所管法令の告示に関する各種業務や、関係部署との調整といった業務を行っております。



司 会：どのようなきっかけで農水省を志望されたのでしょうか。
また、前職での経験をどのように活かしていきたいとお考えでしょうか。

（農林水産省）

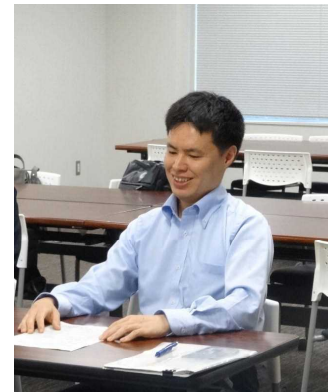
上 氏：前職と直接関わりはないのですが、農林水産省の仕事の一連の動きや農業の現状がどうなっているのかを理解した上で、今後、スマート農業の促進などに携わっていったら良いと考えております。

現在、農業は経験や勘という部分で属人化しているところが大きいですが、データ化を進めたり、作業自体も自動化していくことが必要であり、そういった点では前職の経験が生きてくると思います。

私は元々農業に興味があり、どこかで携わりたいと思っていましたが、農林水産省に官庁訪問や説明会に行った際に、経験に関係なくエンジニアなど数字に強い人であれば需要があると言われてチャレンジしようと思いました。

(観光庁)

中村 氏：私はこれまで、台湾、中国、東南アジア方面への海外営業に携わり、日本の製品を輸出して現地に普及させる仕事をしてきました。その中では、台北での駐在も経験し、日本と現地の間に入り日本からの来訪者のアテンドや、現地での営業展開等に関わってきました。



今の仕事は大きく分けて2つあります。1つ目は多言語化に関する取組、2つ目は災害時の外国人への情報提供です。多言語化とは、各交通機関や観光地等で外国人の方々にスムーズかつストレスなく旅行や移動をして頂けるよう、表示や案内の言語を拡充していく取組です。

災害に関しては、昨年度台風や大雨の影響が西日本を中心にありましたけれど、それら災害発生時に外国人へ速やかに的確な情報の提供を行って、安全と安心を提供する体制づくりに携わっています。

司 会：今までのお仕事と共通する点などはありますか。

(観光庁)

中村 氏：今までの仕事との連続性については、数多くの方々との話し合いや調整をして仕事を構築していく部分で、これまで経験してきた国内外の顧客とのコミュニケーションの経験が生きていていると感じています。

質 問2：働き始める前と後でイメージにギャップはありましたか。

（内閣府）

太田 氏：官庁訪問の際に丁寧に説明していただいたので、ギャップは特に感じませんでした。ただ、単純に民間企業とお仕事の仕方を比較したときにカルチャーショックを受けた部分はいくつかありました。前職の部長は役員でも秘書もついておらず個室でもなかったのですが、今その役職の方に会うとなるとアポを取ってお部屋を訪ねなくてはならないので驚きました。前職は外資のような雰囲気がありましたので特殊だったのかもかもしれません。

（財務省）

中原 氏：前職で銀行にいたときも、企画をするにあたって現場の意見を聞いたり、法律的なリスクがないか顧問弁護士と話したりするなど、色々な利害などを調整したりしていました。そういった意味でも、財務省も色々な利害関係者が入り乱れていて調整が大変だろうと思っていました。実際に入ってみて、色々な部署と調整することは多いです、外部の意見も踏まえていかななくてはならないこともあり、そこはイメージ通りでした。

ギャップを感じたのは、働き方が意外とメリハリがついているということです。ゴールデンウィークも10連休を取ることができました。今の職場ではできるだけみんな早く帰ろうとしています。国会業務や繁忙期など自分でコントロールできないときもあるのですが、早く帰れる日は早く帰ります。年柄年中遅くまで残っているというイメージがあったので、良い意味でギャップでした。

（外務省）

川上 氏：国連機関勤務時の日本人外交官の方々との出会いがきっかけで、外務省受験を決めました。このため、特にイメージのギャップはありませんでした。入省してみて感じたのは、思った以上にボトムアップで意思決定がされていくことです。担当レベルで考えた案が、大きな一つの政策になっているものがたくさんあると感じています。

また、個々の省員が抱えている守備範囲は広く、業務量が非常に多いという印象を受けました。その中で、どうやって効率良く合理的に、そして、日本の国益に資するような政策として昇華していくかということは難しいと感じています。今私が所属している職場は風通しが良く、上司や同僚と相談できる雰囲気になっており、また、自分が手一杯になっているときにサポートしてくれる、チーム全体で業務を進めていこうとする体制になっています。そういったところは、外務省に入って良かったと思うところです。

(農林水産省)

上 氏：良い意味での驚きは、思ったよりも働きやすい職場だと思いました。なるべく残業をしないように心掛けているのが、課長などの上の役職の方からも伝わってきます。また、現在妻が妊娠中なのですが、育休を取った方が良いと言ってくださったり、セミナーを紹介していただいたりしました。ただ、フレックスは前職の頃よりも使用しづらいと感じました。育児や介護をしながら働くとなった場合に、テレワークとフレックスを組み合わせれば、より働きやすくなると思います。

悪い意味での驚きは紙の量が多いことです。聞いてはいたのですが、こんなにあるのかと驚きました。そもそも資料の量が多いのでPDFで見るのが大変で、紙の方が効率が良いということも理解できるのですが、あまりにも紙の量が多すぎて業務に支障をきたしているのではないかと感じます。そこまでの情報量が必要なのかということなども含めて今後対策を考えていけるのではないかと感じます。

(観光庁)

中村 氏：入庁前に国家公務員の友人の話を聞いたりしていたので、ギャップはあまりありませんでしたが、強いて挙げるなら思っていた以上に庁内で人と人との関わり合いがあって、活気のある雰囲気の中で仕事ができていると感じています。観光庁独特の文化なのかもしれないのですが、外部の自治体や民間企業から調査員・実務研修員として来られている方が多いことなども、そういった雰囲気につながっているように感じます。

質 問3：経験者採用試験の受験を考え出してから、採用されるまでのプロセスの中で大変だったことや良かったことなどを教えてください。

(内閣府)

太田 氏：7月に開催された合同説明会が良かったです。私はその説明会に行って試験を受けてみようと思いました。色々な省庁の方がいて、かつ、質問もフランクに受け付けていただきましたし、それをきっかけに、それまでの自分がどう働いてきたか、これから先何がしたいのかということ考えることができました。官庁訪問は私の場合は都合をつけていただいて、夜遅い時間にも面接をしていただいたところもあります。それだけお話を聞いていただけるのだと感じる良い機会になりました。

(財務省)

中原 氏：経験者採用の説明会について、新卒のときと比べて回数が少なくなるのは仕方ないと思うのですが、各府省の人の顔がもっと見えると良いのになと思いました。どういった人が働いているのかというところは情報収集が難しかったです。また、官庁訪問が平日ということも、社会人には厳しかったと思いました。

(外務省)

川上 氏：筆記から面接試験を通じて、これまで学んできたこと、経験してきたことなど、点と点を線で結ぶという作業が全体を通してありました。もし入省したらどのような仕事がしたいのか、これまでの職務経験を活かすことができるのか、ということをも自分なりに調べて準備しました。そのプロセス自体が非常に重要で、これからの職業人生を考える上で大事な期間だったと振り返っています。

(農林水産省)

上 氏：試験合格後に説明会があって、どの府省がどのようなことをしているかがわかり、良かったです。ただ、私は関西から来ていたので、関西での説明会も行っていただけたらと思いました。説明会もウェブで行ったり、面接試験もスカイプやウェブ面接といったところも入れていただけると地方からの志望者も増えると思います。

また、試験を受けるに当たってわからなかったところはキャリアパスについてです。係長級で入ったわけですが、係長がどのレベルなのかがわからないことや今まで経験者採用試験で係長級で入った人がどのようなキャリアパスを歩んでいるのかといった情報が少ないと思いました。

(観光庁)

中村 氏：過去に開催された経験者採用座談会がホームページに掲載されており、出席された方々の入庁前の経験や配属等を確認出来たことは、入庁後のイメージ作りに効果的でした。

一方、応募者数が多い新卒採用ではFacebook等も立ちあげられ、より具体的に各省庁の雰囲気を感じられるような仕組みもあるようですので、それらを部分的にでも経験者採用で実施できれば、より経験者採用への認知や、興味を持つ人が増えるように感じます。

質 問 4：これから公務員への転職を目指す方へのメッセージをお願いします。

（内閣府）

太田 氏：働いている中でやりたいことが変わったり、それが鮮明になって違うことがしたいと思ったりすることは誰にでもあると思います。そういう方にとってこの試験はレベル的にも時間という意味でも適切だと思しますので、ぜひ挑戦して思いを活かしていただきたいと思っています。

（財務省）

中原 氏：公務のスケールの大きさは他にない魅力だと思います。普段働いている中で何気なく日本経済や財政状況などについて、国の視点に立って仕事ができるということは、民間企業と比べても、大きなやりがいであり、同時に責任の重さも感じます。非常にチャレンジのしがいのある試験だと思います。

（外務省）

川上 氏：私は大学時代に国際政治や外交を専攻してしまして、当時も外務省の採用試験を受けることを考えたのですが、タイミングが合いませんでした。時が過ぎて、今、外務省で勤める機会を頂いております。若いときにやりたかったことがあるという方は多いのではないかと思います。中途採用を経て国家公務員になるというキャリアパスについて、一般的にはまだまだ知られていないと感じていますので、ぜひ何らかの思いを持った方には経験者採用試験を検討していただければと思います。

（農林水産省）

上 氏：私は新しいことにチャレンジしたいと思って、経験者採用試験を受けました。試験を受けていく中で自分のやりたいことや省庁がどのような仕事をしているのかということを確認しながら、自分の意思を明確にしてきました。もし少しでも気になったら説明会を聞きにいたり、応募したりすることをおすすめします。試験を受けながら、自分の考えをまとめていけば良いと思います。

（観光庁）

中村 氏：観光庁は2008年10月にできた比較的新しい組織です。観光業は総合産業とも言われており、交通、宿泊以外にもSNSの発信による観光地のPRや、農山漁村に宿泊し、日本の伝統的な生活やそこで暮らす人々との交流を味わう「農泊」を通じた農業・漁業との関わり、或いは、オリンピック組織委員会との連携など、周辺産業の幅広さが特徴です。受入れの裾野が広く、様々な分野での経験が生かせると感じるので、是非チャレンジ頂きたいと思います。

～ご協力ありがとうございました～